



## 聞かせてください、あなたの人生

～第1回「聞き書き講座」を開催しました～

「聞き書き」とは、一人一人の人生の物語を「世界で一冊の本」として残すもの。2月22日「聞き書き」の面白さを全国に広げる作家、小田豊二さんを招いた講座に18名が参加し「聞く」ことで生まれるコミュニケーションの素晴らしさを深く味わうことができました。

多彩な聞き書き本を世に出しておられる小田さんのお話は「人は誰でも自分が主人公の物語を生きている」との柳田邦男の名言の紹介から始まります。出会った人の人生を聞かせていただくことが、語り手の喜びと聞き手の学びにつながる。それは、自分が聞きたいことを聞く「聞き取り」とは異なる技術と想像力が求められます。誰でも楽しく語りたくなる妙薬を聞き手はどこから取り寄せられるか。それは「言葉の入った薬箱」。その人の心を動かす「言葉」を選べる「薬箱」を準備しておくのです。小田さんの豊富な経験から、その薬を当てる想像力に触れる、笑いあり唄あり感動ありの講座となりました。

二人一組で「子ども時代」を聞き合うロールプレイでは、「時代背景」「流行った歌やアニメ」などが「薬箱」から巧みに引き出されました。当時の友達や両親の表情、心象風景まで鮮やかに甦る場面となり、初対面同士が相手の思いになりきって話したりと、会場全体が和やかになりました。

ことぶき協働スペースからの提案は、このまちに住む人々から人生を学ぶ場を、聞き手も語り手も、幸せに豊かになる場をつくること。そこで生まれた共感が生きがいや健康増進につながることを参加者とともに願い、今後の事業に生かしていく予定です。

- ◇小田さんがアドバイザーとなって、さまざまな方が制作された「聞き書き本」を協働スペースに展示していますので、ご自由にお読みください。(期間限定展示)
- ◇また、本号の「今月の一冊」は、小田さんが書かれた聞き書き本です。こちらも併せてご覧ください。

※新型コロナウイルス感染防止に万全を期すため、全員がマスクを使用しています。



## 幅広い活動を通して「記憶」を取り戻す試み

西六男さん (仮名)

1月下旬、ふらりとことぶき協働スペースを訪れた男性。西と名乗るその男性は、昨年11月27日以前の記憶がないといいます。「横浜駅で目が覚めました。なぜこんなところで寝ていたのか。そもそも自分が誰なのか。何も思い出せないことに気がきました。財布など身元が分かる物は持っていませんでした。今思えば、正常な判断ができていなかった。警察や役所に駆け込むことなく、そのまま路上で生活していました。覚醒から12日後、福祉団体の方に声を掛けられ、ようやく西区役所を訪れたのです。」そこで「西六男」という仮の名を与えられ、生活困窮者の一時保護施設「はまかぜ」に入所しました。診察の結果「解離性健忘症」と診断されました。

記憶がない、時おり強い頭痛がすること以外いたって健康な西さん。じっとしていても何も始まらないと失った記憶を取り戻すべく積極的に行動されています。当スペースで開催した数々のイベントには、参加者としてだけでなく運営スタッフの一員として携わってくれました。さらに毎週金曜日の炊き出しボランティアに参加。また文章を書くのが得意とのことで、ボランティアライターとして3月号の「ことぶと」を執筆していただきました。

スタッフやご友人と会話する中で、断片的に記憶が戻ることもあるようです。たとえば詩人の故・吉野弘さんの自宅を訪れたことなど…。自立した生活への設計を日々考えておられるという西さんは、引き続きボランティアにも関わっていきたく希望されています。

私たちは医療機関ではないので、彼の記憶を取り戻すお手伝いはできませんが、西さんの新生活が一層充実したものになるよう、ことぶき協働スペースは今後も応援し続けていきます。

※取材・撮影・執筆に関しては、予めご本人の了解を得ております。



## project

## 寿クッキープロジェクト

～ ついに実現！ろばの家と協働スペースのコラボ企画～



「ことぶきならではのオリジナル製品を作れないだろうか」そんなことを考えていたところに「知人の還暦祝いに『寿』型のクッキーを作れませんか」という相談が舞い込みました。寿町、翁町、長者町... そう、この地区は縁起のいい町名ばかり。これは一考の価値アリと、早速上野かつば橋道具街にある金型専門店へ向かいました。

なんと、店には金型職人が試作した日本で唯一の『寿』金型がありました。が、既に売れてしまった後。諦めるしかないのか。いや、どうしても寿の金型が欲しい。祈るような気持ちで店主にお願いすると「職人に連絡を取ってみる」と。そして特別に、寿の金型を作ってくださいました。

極めて複雑な寿の金型。この金型でクッキーを製作してくれるところはあるのか…。寿のまちで障がいのある方を支援している「地域活動支援センターろばの家」に持ち込むと、試行錯誤の末、見事な『寿』クッキーを試作してくださいました。厚さや色味を変えて数パターンを試作し、レシピが決定。もちろんクッキーの味はお墨付きです。「こんな形で私たちの寿のまちを表現できて、ろばの家のメンバーも喜んでいきます」とスタッフの青山さんは語ってくれました。

還暦祝いだけで終わらせるのはもったいない寿クッキー。「型抜きが難しいので大量生産はできませんが、少しずつでも心を込めて皆さんに届けていきたい」と想いを語るろばの家のメンバー。「寿クッキーが寿のまちの銘菓になれば…」と、そんなことを想いながら、今日も美味しくいただきます。

